

第1回 初代川崎市長 石井泰助
～ 川崎発展の礎を築く ～
平成26年11月14日(金) 18:30～20:30
川崎区役所 7階 第1・第2会議室
望月 一樹氏(川崎市市民ミュージアム学芸室長)

■講師紹介

1961年生まれ、開館当初から市民ミュージアムで学芸員として勤務し、現在にいたる。「東海道」展・「池上幸豊」展・「二ヶ領用水ものがたり」展・「近代川崎人物伝」展など、数多くの企画展を担当する。

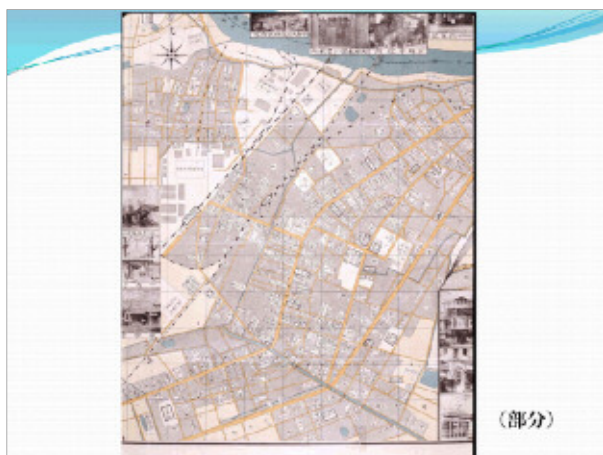
(1)はじめに

私は、「市民ミュージアム」(中原区)という博物館で学芸員をしている望月といいます。今年は、川崎市制90周年という節目の年であり、市民ミュージアムでも「近代川崎人物伝」という企画展を開催しました。その企画展で「石井泰助氏」をテーマの一つに取り扱ったことから、その中で調べたことや気づいたことを含め、川崎市の歴史とともに、石井泰助氏についてお話しいたします。



望月 一樹氏

さて、本題の「石井泰助氏」の話に入る前に、川崎市の誕生から現代までの歩みを振り返っていききたいと思います。川崎市は、90年前の大正13(1924)年7月1日に、当時の川崎町・大師町・御幸村の2町1村が合併して誕生しました。また、当時の市域面積は22.23km²と記録されています。現在の川崎市域は、東西に約31km、南北に約19kmで、面積は144.35km²となっており、90年前と比較すると約6.5倍面積が拡大しています。また、誕生当時の人口は、48,394人と記録されており、現在は世帯数が約68万世帯、人口が約145万人を超えているので、約30倍も人口が増加したことになります。最近、川崎区南部で新しく大規模マンションができたり、市民ミュージアムがある中原区武蔵小杉周辺にタワーマンションが次から次へと建設されるなど、1～2万近くの人口が一挙に増えてきています。これまでは、どちらかというと宮前区や麻生区などの丘陵地帯が開発され、東京のベッドタウンとして川崎の人口が増えてきましたが、最近では中原区や幸区などの工場跡地を住宅地化・マンション化していることもあってか、人口が年々伸びている状況です。



〔図1〕

図1は、川崎市が誕生した大正13(1924)年の川崎市の地図で、全体はもっと大きいのですが、これは川崎駅及び川崎区役所周辺に焦点を当てたものになります。左側を走っている線路が今のJR東海道本線で、右側を走っているのが今の京急本線です。多摩川沿いに走っているのが今の京急大師線ということになります。

現在は、市役所通りや新川通りなどの太い道が海の方へ向かって通っていますが、当時はそうした道がありませんでした。どちらかというと、南北ではなく、東西に太い道が走っており、地図中の中央の太い道は「東海道」になります。今のいさご通りの辺りです。

今では道が細くなり、あまり目立たないのですが、江戸時代の東海道といえば川崎の街のメインストリートでした。網掛けになっている地域は、商業地域です。米屋や雑貨商、食料品などのお店が、東海道を中心にこの辺りに広がっていました。川崎駅の向こう側には、東京電気(現・東芝)堀川町工場があり、現在は「ラゾーナ」という商業施設に変わっています。左上の多摩川の方の現在のソリッドスクエアの辺りには、明治製糖

がありました。このように当時も既に工場が進出してきています。この工場進出に関して、本日のテーマである石井泰助氏が深く関与しているわけです。その辺りは後ほどお話していきます。地図を見ると分かるように、当時の賑わいは東海道を中心としていました。なお、地図下の白い部分は田圃や畑などになります。



【写真①】

次に、写真①～⑤は、大正13(1924)年7月1日の市制施行を記念し、4か月後の11月に開催された記念パーティーの際、参加者に配布された絵葉書です。その絵葉書が市民ミュージアムに収蔵されていたので、そこから当時の川崎の街を見ていきたいと思えます。

写真①には、「近江屋」という布団屋が写っています。大八車(だいはちぐるま)が両脇に並び、子どもが道で遊んでおり、のん気に動物が道を横断している様子が見て分かります。また、遠くを見ると、当時誰もが欲しがったT型フォード車が写っています。実は、これは東海道の景色です。右奥の立派な建物は当時の郵便局で、これにより当時の位置関係が分かります。

この景色は、現在の砂子2丁目付近のもので、ちょうど川崎信用金庫本店から小土呂橋方面を見た風景だと思ってください。今では考えられないのんびりとした風景なわけです。先ほど、商業地域は東海道沿いに広がっていたとお話しましたが、このように布団屋や食料品店が建ち並び、大八車が並ぶ光景が広がっていたわけです。写真の下に「川崎市制記念 市街」と書いてあるので、ここが市街地の一番メインということで、この写真が絵葉書に使われているのだと思います。



【写真②】

写真②は、下に「市役所」と書いてあり、これが川崎市誕生当時の市役所になります。場所は、現在の市役所本庁舎の場所ではなく、その裏手の通りを稲毛神社参道へ進んだ方にあつたといわれています。この建物は、元々市役所としてではなく、川崎町の町役場として建てられ、市制施行に伴い、町役場から格上げされて市役所として使われました。この写真は、建物を背景に、当時の市役所の幹部や議員の方々々が写っている集合写真で、中央に石井泰助氏がいます。なお、川崎市が誕生する前年の大正12(1923)年9月1日に関東大震災が起きたので、この写真をよく見るとしんがり棒が建物に掛かっています。ご覧のとおり木造建築でしたので、関東大震災にて何らかの被害があり、建物をこれで支えていたのだと思います。この建物が川崎市役所の始まりとなりました。



【写真③】

写真③は、川崎市の名所旧跡ということで、川崎大師平間寺の山門を境内から撮った写真です。立派な山門ですが、これは太平洋戦争にて焼失していますので、この写真は焼失前の山門の姿を写した貴重な写真でもあります。山門を仲見世通りの方から入り、大本堂に向かう途中に「宝篋印塔」(ほうきょういんとう)という石造物がありました。現在は脇に寄せられて植込みの中に移動しています。これは、徳川家の御三卿の1つである田安家により、厄払いの祈願のために川崎大師に奉納されたものです。これが90年前の川崎大師平間寺の風景となります。ちょっとした屋台が出て名物を売っている姿は今とあまり変わりありません。



[写真④]

写真④は、現在の川崎区役所の向かいにある稲毛神社の当時の社殿です。社殿の脇に木がありますが、これは今も現存する大イチョウで、戦火にも耐え抜き現在も残っています。ところで現在の社殿は、この大イチョウに向かって建っており、この写真では社殿の脇に大イチョウが位置しています。実は当時の社殿は、現在の市役所通りの方を向いて建っていましたが、戦争で焼失し再建された際に90度向きを変えて国道15号線の方を向く形に変わりました。



[写真⑤]

写真⑤は、殺風景な風景が広がり、中央に貯水槽タンクがあり、いくつか建物が写っています。写真下には「浄水場」と書かれています。これも後ほど、石井泰助氏の業績に関する話の中で説明しますが、この写真は、大正10(1921)年に開通した、合併前に川崎町が独自で敷設した川崎水道の浄水場を写したものです。場所は、現在の幸区役所・幸市民館のある場所です。

さて、写真①～④は、市街地や庁舎、名所旧跡などが絵葉書の題材となっており、各々絵になる風景でしたが、この写真⑤だけ殺風景で他から浮いています。実は、この川崎町の水道敷設こそが、川崎市誕生の大きな契機だったのです。

それまでは飲料水は二ヶ領用水や井戸水が使用されていましたが、人口増加や水質汚染の影響により、良質な水を得ることが段々難しくなり、衛生状況もあまり良いとはいえず、当時の新聞に「蚊がさき」と書かれるほど、蚊が大量にわくような状況でした。そこで川崎町は、町民のより衛生的な生活環境を確保するために、上水道を敷設したのです。また、この上水道は川崎町が敷設したもので、川崎町民しか使うことができず、すぐ隣の大師町や御幸村の人々は上水道を利用できず、相変わらず不衛生な水を飲料水として使用しなければなりません。目の前にあるならば使いたくなるのが人情ですので、大師町と御幸村の人々から川崎町水道の利用を求める声が高まってきました。このことが大きな要因となり、町村合併が実現して川崎市が誕生したのです。ですから、川崎市の誕生にあたり、浄水場は当時の人々にとって非常に重要な施設であり、そのため絵葉書の題材になったというわけです。

ここまで90年前の川崎を振り返ってきましたが、その後川崎市は他の町村の編入を進め、まず昭和2(1927)年に田島町を編入します。臨海部の工場地帯を抱えていた当時の田島町は、独自の水道敷設も検討したそうですが、一町村では成り立たないということで、契約を締結して川崎市の水道を引けるようにしました。しかし、水道使用量が増えていき合併せざるを得ない状況となり、川崎市への編入となりました。その後、昭和8(1933)年に中原町が編入され、さらに昭和12(1937)年4月1日に溝ノ口を中心とした高津町と日吉村の一部が編入されました。日吉村の一部とはどういうことかという、これには事情があります。川崎市幸区に日吉地区がありますが、横浜市にも港北区に日吉があります。横浜市の日吉には慶應義塾大学のキャンパスがあるため、日吉というと横浜を連想する人が多いかもしれません。この両市の日吉は、当時は同じ日吉村でした。その日吉村に対し、川崎市と横浜市の両方から合併の働きかけがありました。どちらと合併するか村の中で争いが起き、最終的には神奈川県が裁定し、鶴見川の支流である矢上川を境に、西側は横浜へ、東側は川崎へ(一部横浜へ)と編入され、日吉村は横浜市と川崎市に分割合併された形になりました。

同年の昭和12(1937)年6月1日には、現在の高津区千年など同区南部地域にあたる橘村が編入されます。昭和13(19

38)年には、宮前(みやさき)村・向丘村・生田村・稲田町、これにより現在の宮前区から多摩区までの地域が編入されます。なお、宮前村の名前の由来ですが、当時の村役場が現在の馬絹神社の前に置かれたことから、宮の前、「宮前」となりました。そして、昭和14(1939)年に「柿生村他1ヶ村組合」が編入され、現在の川崎市域が確定しました。柿生村他1ヶ村の「1ヶ村」とはどこかという、川崎の飛び地と呼ばれる現在の「岡上」地域になります。岡上は、町田市と横浜市に囲まれ、川崎市とはどこにも接していません。先ほどの日吉と同様に、横浜市と川崎市のどちらと合併するか、岡上村の中で議論が起きました。本当は、岡上村は町田の方と合併したかったのですが、町田は東京府で岡上村は神奈川県だったので、県から府に編入することができず、横浜市か川崎市かの二者択一となりました。隣接する奈良村は横浜市に編入しますが、この奈良村と岡上村は険しい山や坂に隔てられるなど地形的理由等から交流が少なかったようです。また、小田急線が開通されたことで、登戸で乗り換えると川崎は近いといった理由などから、岡上村としては川崎市と合併する結論となりました。

その後、川崎市は、昭和47(1972)年には人口100万人弱まで達し、政令指定都市になるということで、5区が誕生します。さらに、10年後には人口増加に伴い、高津区から宮前区が、多摩区から麻生区が分区する形で、現在の7区に至りました。これが今の川崎市が誕生するまでの大体の流れになります。

(2)石井泰助とは

それでは、今回のテーマである「石井泰助氏」について、これからお話していきたいと思います。まず、石井泰助氏の生まれた石井家はどんな家だったかといいますと、元々は東海道川崎宿にて、「吹田屋」という屋号で材木商を営んでいました。江戸時代の史料にも吹田屋の記述がありますが、材木商をいつから始めたかについては分かっていません。当時の石井家は、青梅の方にいくつも山を持っており、そこで伐採された材木を多摩川にいかだで流し、東京などで売ることを商売にしていました。吹田屋は、明治9(1876)年に「石井材木店」と改称し、さらに同年に「石井合名会社」となりました。

文久3(1863)年の史料に、江戸時代の吹田屋がどれくらいの規模であったか記録があります。当時の世相は、ちょうど幕末期で、14代将軍徳川家茂が朝廷から呼ばれ、3代将軍家光以来の上洛を果たします。当初は船により大坂へ行くことが検討されましたが、前年の生麦事件の影響で江戸湾にイギリス艦隊が入っており、将軍の乗る船などとも出航できませんでした。そこで、東海道により陸路で上洛することになります。将軍は何千人という家来を引き連れていくわけですから、宿の確保や宿泊者の宿割りを行うだけでも大変なもので、各宿場から当時の家の大きさなどを書き留めた帳面を幕府へ提出させました。その川崎宿の写しが残っており、市民ミュージアムで所蔵しています。その帳面には、各建物の建坪、畳や板間がどれくらいかなど、ある程度細かいことが書かれています。

その帳面にある「吹田屋」の記述には、間口3間半、奥行8間、建坪28坪、畳敷26畳、板敷15畳と記されています。これがどれくらいの規模かという、当時の川崎宿の建物の中で比較すると、中規模クラスだと思います。大規模になると、川崎宿の茶屋として有名な「万年屋」や「新田屋」など、間口10～11間という大きな建物になります。そういった大規模な建物に比べれば、吹田屋は普通の建物よりも少し大きめというくらいの建物だったかと思います。

ただ、この記述は江戸時代のものなので、石井泰助氏が活躍する時代に近いところで石井家の規模を示すものとしては、当時の選挙権の要件であった直接国税の金額によって分かります。

日本で初めて選挙が行われたのは、明治23(1890)年の第1回衆議院議員総選挙のときでした。現在の選挙権は、満20歳になれば男女問わず得ることができるわけですが、当時は誰でも選挙権を持てたわけではありませんでした。当時の選挙権は、満25歳の男子で直接国税15円以上納めている者にしか認められませんでした。なお、女子が選挙権を獲得するのは大分後になってからです。また、被選挙権については、満30歳の男子で直接国税15円以上納めている者しか立候補できませんでした。このように当時は非常に限られた人しか選挙に参加できませんでした。

この当時の選挙人名簿の中に石井泰助氏の名前が出てきます。このときの石井家の直接国税納付金額は268円で、当時の川崎町の選挙人名簿の中では、3番目の高額納税者でした。トップは誰であったかという、小宮隆太郎氏という人物になります。昔、京急川崎駅付近に「小美屋」というデパートがあったかと思いますが、あの小宮家が1位でした。納付金額は375円で、石井家とは100円ほど差があります。2位は島田武助氏という人物で、納付金額は275円でした。この3

家が川崎町では断トツの高額納税者でした。税金がそれだけ多いということは、商売でうまくいっていたこともあるでしょうが、固定資産がたくさんあり土地持ちであったことも、納付金額が高額であった一因なのではないかと思います。

石井泰助氏は、慶応元(1865)年5月10日、石井家に長男として生まれます。「泰助」とは、当時の石井家の当主が代々名乗る名前、子供の頃は父親がその名を名乗っていたので、初名は「泰次郎」という名前が付けられました。明治24(1891)年、26歳の頃に父親の後を継ぎ、「泰助」を襲名しました。その後、30歳のときに川崎町の町会議員に初当選します。その翌年には川崎町の助役に就任し、さらに明治30(1897)年には川崎町長に就任します。石井泰助氏は川崎市長となる前に、川崎町時代に既に町長として町の行政にあたっていました。そして、その石井泰助氏ですが、3回にわたって町長に就任しました。第1期は、明治30(1897)年から翌年までの約1年間、その後少し間が空いて、明治43(1910)年11月に改めて2度目の町長となります。なぜ間が空いたかという点、当時は前町長時代にあった不正問題から川崎町行政の信用が失墜していたときであり、その信用をなんとか回復して町を発展させようと、町の有力者4人が任期ごとに交代で町長を務めることにし、さらに町長の給料はなしと決められました。そのトップバッターに立ったのが、石井泰助氏でした。1期2年だったため、明治45(1912)年11月に石井泰助氏は町長を退任します。その後、再び順番が回ってきて、49歳の明治33(1914)年に3度目の川崎町長に就任し、大正5(1915)年7月に辞任しました。

町長辞任後は、水道敷設に尽力しようということで、町長時代はなかなかできなかった細かい仕事を自ら行うことを目的に、水道敷設の常任委員に就任します。それ以降、石井泰助氏は川崎町水道敷設に尽力を傾けます。その後、59歳の明治33(1914)年12月、市制施行の際に初代の川崎市長に就任しました。そして、昭和6(1931)年7月11日に亡くなります。お墓は石井家の菩提寺である「徳泉寺」(川崎区)にあり、ちょうど京急大師線の港町駅から墓地が見えます。

以上、石井泰助氏の経歴を簡単に説明してきたわけですが、話だけではイメージがわきづらいと思うので、これから石井泰助氏の写真を何点かご紹介していきたいと思います。これらの写真は、市民ミュージアムで企画展「近代川崎人物伝」の開催にあたり、石井泰助氏のご子孫の方々に話を伺っている中で、同氏が写真好きで奥様や娘さんの写真をたくさん撮られていたことが分かり、企画展に使用させていただいた写真になります。なお、企画展終了後は市民ミュージアムにご寄贈いただき、現在ミュージアムで保管しています。



石井泰助 26歳

[写真⑥]



石井泰助 50歳

[写真⑦]

写真⑥は、26歳の石井泰助氏です。ちょうど「泰助」の名前を襲名した記念に撮影した肖像写真だと思います。面長の細面で少しきゃしゃな感じがします。当時はなかなかの美男子と言われていたのではないのでしょうか。この写真は、銀座にあった有名な写真館で撮影されたものです。写真⑦は、50歳の石井泰助氏です。これは、横浜の写真館で撮られたもので、紋付袴を着ておられます。



石井泰助 65歳

〔写真⑧〕

写真⑧は、亡くなる少し前、65歳のときに撮った写真です。当時、写真館で撮影することは、お金のかかることだったと思いますが、こうして写真を残してくれたおかげで、経歴を見ただけでは分からない、石井泰助氏の人となり少し伝わってくるような気がします。今でもそうですが、電話や手紙のやり取りだけではなかなか伝わらないことが、実際に会ってみたら分かるということがあるかと思います。同じように歴史上の人物についても、写真で顔を見ると、想像がふくらんで理解しやすくなるのではないのでしょうか。



〔写真⑨〕

さて、次に石井泰助氏にまつわる石造物を紹介します。写真⑨は、市役所通りを挟み川崎区役所の向かい側にある稲毛公園の一角に建つ石井泰助氏の顕彰碑です。碑に刻まれた「遺芳千秋」とは、後世にまで残る名誉や業績のことをいい、碑文には石井泰助氏の業績が記されているというわけです。この碑は、石井泰助氏の13回忌にあたる昭和18(1943)年6月に、菩提寺の徳泉寺に建立されました。その後、市制40周年の昭和39(1964)年に、その業績をもっと広く市民に顕彰しようと、現在の場所に移設されました。その辺りの事情も解説板に書いてありますので、是非ご覧いただければと思います。

(3) 石井泰助の業績

それでは、川崎発展の礎を築いた石井泰助氏の業績について、具体的にお話していきたいと思います。

石井泰助氏は川崎町長を3期にわたり務めました。2期目にいろいろな動きをすることになります。石井泰助氏は、町長時代に何を考えていたかという、どのようにして川崎町を発展させるかということだったと思います。そこで、石井泰助氏は町長時代に3大事業を掲げ、それを実行に移していきます。1つ目は「上水道の敷設」、2つ目は本日のタイトルに大きくかわる「工場の招致」、3つ目は「道路の整備」です。その中から、今回は「上水道の敷設」と「工場の招致」、これに加えて石井泰助氏が関与した「多摩川の河川改修」、この3つのテーマを中心にお話します。

① 上水道の敷設

上水道の敷設については、明治43(1910)年、石井泰助氏が2期目の川崎町長に就任した際に計画されました。ただし、どのような経緯で計画されたのか、これについては史料を探しても出てこないの分かっていません。

一方、石井泰助氏は日記をつける習慣がありました。活字になっていないので、ほとんど知られていない幻の日記といわれています。残念ながら現物は残っていませんが、唯一コピーが残っています。また、それも断片的なコピーで、年度も飛び飛びで一部のページしか残っていません。しかし、石井泰助氏は非常に几帳面な方だったらしく、細かくつづられています。日記からは、日々の石井泰助氏の行動がよく分かり、私事だけでなく、川崎町長としての業務についても詳細に記されていることから、川崎の近代を知る重要な手がかりとなる資料といえるでしょう。ではその日記から、水道敷設に関する記事を抄出してみたいと思います。

～『石井泰助日記』～

『明治44(1911)年2月6日 水道設計技師久保平吉及町有志及委員ノ来集ヲ待ツ、同九時半一同ト共ニ出足、上丸子ニ至リ同地鈴半ニテ昼食ヲ為シ、玉川沿岸ヲ巡検シ、(中略)、瀬田ニ至リ、玉川電車ニ乗り帰崎』

『明治44(1911)年5月9日 水道技師久保氏出張、同氏及委員余等五名水源地変更ニ付視察ノ為御幸村上平間ニ赴キ、午後六時帰ル』これは、5月9日に水道技師の久保氏と委員5名で出張したとあり、上水道なので水源地から水を取水するわけですが、その水源地の変更にあたり御幸村の上平間を視察に訪れ、午後6時に帰ったということです。

『明治44(1911)年6月15日 午前十時水道技師久保平吉来リ、設計ノ説明ヲ為ス、其費額十六万円也ト云フ』とあり、6月15日に久保氏が来て同氏から設計の説明を受け、費用が16万円かかると言われたと書かれています。

『明治44(1911)年11月22日 川崎町水道敷設ニ関シ町会開会、水道部ヲ設ケ自分部長ニ推薦セラレ(後略)』とあり、11月22日に水道敷設に関する町会を開き、そこで新たに水道部を新設することが決まり、町長でありながら石井泰助氏自らが水道部長に推薦されたということが書かれています。

『明治44(1911)年12月26日 川崎町水道敷設願書ヲ提出ス』ということで、神奈川県に対して申請を行いました。しかし結果は、財政的な理由から申請の取下げを命じられてしまいました。このときは石井泰助氏も断念せざるを得ず、第1回目の水道敷設計画はここで頓挫してしまいます。

その後、大正3(1914)年に3期目の町長に就任するわけですが、町長時代は水道事業だけに注力するわけにはいきませんでした。そこで、石井泰助氏は、大正5(1916)年の町長辞任後、水道敷設の常任委員という形で、自ら率先して早期の実現を目指すことにしたのです。そして、県から取下げを命じられた計画の見直しや、財政的な問題を解決するべく、各方面の協力を取り付け、国に起債をお願いして財源に充てるなど、水道敷設のために精力的に行動しました。石井泰助氏の日記にその具体的な行動が記されています。

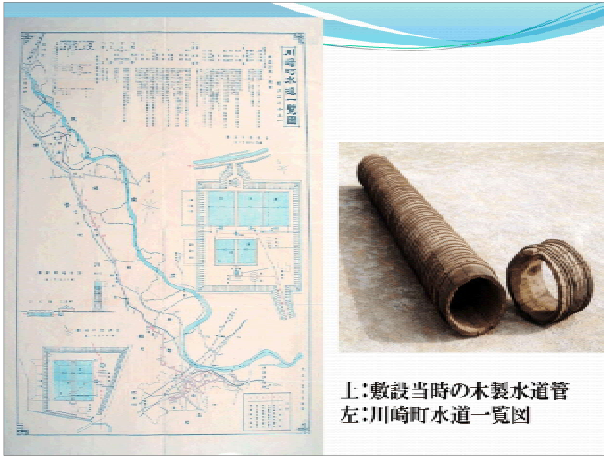
『大正6(1917)年1月20日 水道技師和田忠治氏旧臘依願セル限度向上ノ新設計書ヲ持参セラル、改限度八万人工費総額六五万円トナル』先ほどは、久保平吉氏という技師の方でしたが、和田忠治氏に交代し、前年の12月に依頼していた設計書を持ってきたと記されています。それによると、最大8万人に供給可能な給水能力で、工事費は総額65万円と書かれています。先ほどの16万円から随分高くなっています。これを受け、石井泰助氏は資金面の協力を各方面にお願いすることにし、既に川崎に進出していた各企業の工場に対し、工場での水の使用や労働者の衛生環境の向上などの面から、水道敷設の早期実現の必要性を訴え、各工場を回って説得を始めます。

同年5月16日に富士瓦斯紡績川崎工場長の麻村美久氏と面会、5月17日に味の素の鈴木忠治氏と面会、5月18日に日本蓄音器(現・日本コロムビア)を訪問、5月19日には東京電気(現・東芝)を訪問します。数日間で毎日、水道の件で大企業を回りました。これは間違いなく資金調達のお願いだっただと思います。

石井泰助氏が自ら直接出向いて説得したことが功を奏し、5月22日午前10時に水道敷設の件で郡役所へ各社に集合してもらいます。集まった会社は、東京電気、明治製糖、合資会社鈴木商店(現・味の素)、京浜電鉄(現・京浜急行電鉄)、富士瓦斯紡績で、この他川崎町委員や町長、そして自らも出席し、『四万人給水布設五十万円ノ案ニ依ル』と日記に記しています。1月20日に水道技師和田忠治氏により、8万人の給水能力で工事費65万円と説明を受けたとありましたが、これはあまりにも規模が大きく高額だということで、石井泰助氏が規模を縮小した案をつくり、その案に基づき各企業にあたったのだと思います。その案が4万人の給水能力で工事費50万円だということが、この記載から分かります。5月23日に前日に集まった企業に対し、技師の和田氏も出席して詳細を説明し、各会社の出金配当額を決めます。その結果、富士瓦斯紡績と東京電気は各7万5千円、明治製糖と京浜電気鉄道は4万円、合資会社鈴木商店は2万円として、合計25万円となりました。総工事費の半分をこうして各企業の出資により賄ったことが、この日記から分かります。

3か月後の8月27日に、『本日多年ノ懸案タル水道布設ニ関シ出願ノ為、関係書類一切ヲ町会ノ議ニ附ス、郡長県属及和田技師立会、満場一致何ノ故障モ無ク可決セリ、是ニテ同問題モ漸ク実行期ニ入ルコトナリ大ニ意』とあり、全ての条件は整ったということが、石井泰助氏の日記の記述から分かります。

その2年後、いよいよ工事が着工し、2年の歳月をかけて、大正10(1921)年3月に工事が竣工、同年7月から通水が開始されました。そのときの記念として発行されたものが、川崎町水道一覧図(次ページ)です。



一覧図の横は水道管です。これらは市民ミュージアムに所蔵されています。水道管の長さは3メートルほどで、桶のように木の板を組み、鉄製のたがで固めてつくられています。短いものは、ジョイントするためのもので、長い管同士を接続する際に用いました。水源地から取水された水は太い配水管を通して分岐し、細い給水管を通じて各家庭に給水されました。先ほど紹介した絵葉書の写真に、鉄塔の写った浄水場の写真がありましたが、同じものがこの一覧図にも描かれています。

[写真⑩]

川崎町水道の水源地について、先ほど石井泰助氏の日記に水源地を変更するために上平間を訪れた旨が書かれていましたが、最終的には上平間ではなく、さらに上流の現在の「宮内」が水源地となりました。宮内から延々と今の府中街道に沿って地中に水道管を埋設し、川崎町まで給水したということです。給水地点に近いところから取水すれば、より短時間にお金をかけずに取水できるはずなのに、なぜ川崎町により近い上平間ではなく、宮内を水源地としたのでしょうか。これには理由があります。多摩川は東京湾へ流れ込みますが、満潮時になると海水が多摩川に流れ込み、汽水(淡水と海水が混じり合った塩分の少ない水)域が生じます。ちょうど現在の丸子橋辺りまでが大潮時に汽水域となります。上平間から取水すると、大潮時に海水が混じってしまい、これを飲料水にはできないということで、丸子橋よりさらに上流の宮内を水源地とせざるを得なかったのです。このため、延々と宮内から川崎町まで水を引いたわけですが、その途中の村や町にしてみれば、水源地が近くにあるのに自らは水道を利用できないというのは何とも歯がゆいですね。このような状況を踏まえると、大師町や御幸村の人々が川崎町水道の利用を求め、これが合併の契機となった事情がよく分かります。その後、他の町村も後に続いて川崎町と合併していくわけですが、宮内から川崎町へのルート間に位置する中原町や日吉村などの編入に際しても、水道利用が大きな要因になっていたのです。

大正10(1921)年、こうして石井泰助氏の尽力の下に、川崎町の水道敷設工事が完了したわけですが、これが同氏の最も大きな業績ではないかと思えます。上水道が敷設されれば、インフラ整備が整うことで人口増加につながり、工場誘致にしてみても、他の地域より優位性が高くなります。そうした意味でも、水道敷設は、実に大きな業績であったといえます。

写真⑪は、水道敷設記念の絵葉書です。市制施行記念の際もそうでしたが、当時何かの記念の折には、よく絵葉書が発行されました。左上が浄水場全景で、右上は浄水場内に建造中のろ過した水をためる配水池で、当時はレンガ造りのこのような立派な施設だったことがうかがい知れます。



[写真⑪]

左下は取水地である宮内の多摩川水源風景で、右下は水道管を埋設している工事風景です。これらの当時の絵葉書は、水道敷設に関する貴重な史料となっています。

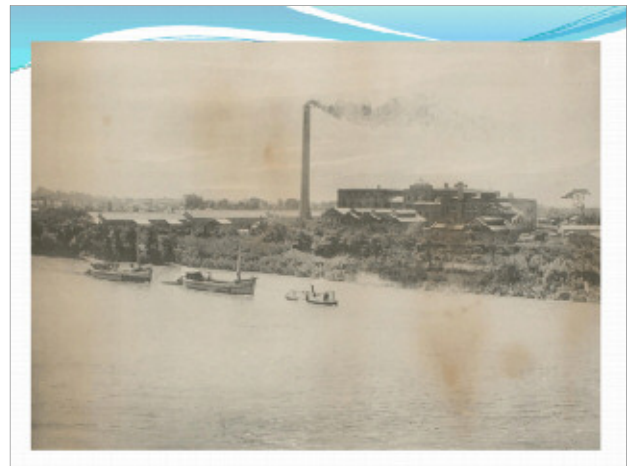
② 工場の招致

明治32(1899)年1月21日に大師電気鉄道が開業したのですが、これは川崎にとって大きな出来事でした。これに石井泰助氏が直接どこまでかかわったのか、同氏の日記は残っておらず、当時の記録があまりないので詳しいこと

は分からないのですが、大師電気鉄道の敷設が請願された明治29(1896)年に同氏は川崎町助役となり、さらに許可が下りた翌年に川崎町長に就任したことを踏まえると、行政の立場として同氏がこの件に大きく関与したのではないかと思います。大師電気鉄道は、京都、名古屋に続いて日本で3番目に開通した電気鉄道で、東京よりも前に東日本で最初に電車が走ったのはこの川崎なのです。大師電気鉄道は、川崎大師への参詣客輸送を目的に敷設されました。また同社は、動力の供給源として発電所を建設し、電車を走らせる以外の余剰電力の供給事業も行いました。このように電車が走ることで地域への恩恵もあったことから、石井泰助氏もおそらく積極的に関与したのではないかと思います。そして、大師電気鉄道の敷設は、その後の工場招致の契機となりました。

また一方で、川崎は、既に明治5(1872)年に鉄道の駅が開業しており、さらには多摩川の水運もあるということで、旅客輸送・物資輸送の両面に優れていました。

さて、最初に川崎へやってきた工場は、横浜精糖(後の明治製糖)の工場でした。写真⑫は、横浜精糖時代の写真です。工場写真はそれほど残っていないようなので、貴重な写真だと思います。横浜精糖に続いて東京電気などが進出してくるわけですが、これらの工場がどのような形で招致されたのかは、古文書や企業の社史にも残っていないと思われます。では何に依拠して語るかというと、唯一その典拠となるのが、昭和2(1927)年に発行された『川崎誌考』です。『川崎誌考』は、大正期から昭和戦前にかけて活躍した郷土史家の山田蔵太郎氏により執筆されました。



[写真⑫]

現在では、川崎の歴史を調べようとすると、『川崎市史』など行政が出版した自治体史が基本史料となりますが、当時は、地元郷土史家が地域のことを調査・研究して郷土史等を自ら出版しており、行政が自治体史を出版する必要がありませんでした。そうした郷土史家の研究に基づいた『川崎誌考』は、川崎の歴史を知る良い手がかりになります。昔のことなので疑うことも多々ありますが、『川崎誌考』は今読んでも役に立つ出来の良い本だと思います。山田蔵太郎氏は、近代のみ研究したわけではなく、江戸時代や考古学に至るまで自ら興味を持った事柄について細かく調べて書き残しています。『川崎誌考』は復刻版が出ており、各図書館に配架されていると思いますので、興味のある方は是非ご覧いただければと思います。

そして、なぜ工場招致の件で『川崎誌考』が参考になるかということ、他に史料がないということもありますが、『川崎誌考』は誰が出版したかということが関係します。出版元は石井文庫となっていますが、『川崎誌考』は実は石井泰助氏の下で出版されました。昭和2(1927)年というと、石井泰助氏は存命中ですので、山田蔵太郎氏は近代部分を執筆するにあたり、当事者である石井泰助氏から聞き取りをして、細かく書き記したのではないかと思います。

資料1 横浜精糖

明治三十八年に横濱の豪商増田増藏、阿部幸兵衛兩氏の計畫で川崎と御幸村との入會地で六郷川の岸に沿ふた鐵道線路側に當る地點に横濱製糖會社を設置さるゝ事となり其處には自分の所有地が大部分あつた關係で買収上の交渉を受け其の他色々の相談も受けた。日頃自分は何とかして繁華な川崎にして見度いといふ希望があつて、其れが絶えず念頭に浮んでゐた折柄であつたので早速時價に相當せる坪壹圓の割で喜んで需めに應じ且小宮隆太郎、島田武助氏にも交渉を試みたところ兩氏も喜んで之に應ぜられたので工場は程なく竣功して四十年の十二月開業となつた。所が其の年の八月の大洪水で工場は濁水に浸されて大分難儀され、四十三年にも亦同様の不幸に遭遇するといふ始末で一時實業家方面では川崎は到底工場地にあらざると云ふ評判が立つたので自分は内心踏からず心配したのである。

資料2 東京電気

それから立川勇次郎氏が京濱電鐵社長であつた頃、自分の所有地が一ヶ所にて一萬坪以上の者あり、將來川崎を工業地としたければ何卒利用の機會を得られかねば最低坪壹圓で御譲り致すに依つて、川崎の爲に御配慮を被り度いと願んで置いたことがある。其の話から二三年も過ぎた頃其の時氏は東京電氣の重役であつたが、工學博士藤岡市助氏と共に其の地所を見せて呉れと云ふ申込があつた。

自分の所有地の外更に一萬七千坪ばかりの買収方を委託されたので、これをも引受けて此の分は坪一圓三十錢で、自他總計三萬坪を取纏めて提供したのは三十九年の十二月であつた。然るに四十年と四十三年とに大洪水があつて之が爲に重役間に川崎放棄説が持上ると云ふ始末であつたが幸ひ如何なる水にも浸水を受けない程度に盛土をすれば宜からうといふに決定したのである。これに就ても亦聊か特製の勞を執り、加瀬山の一端を買収し軌道を敷いて土を運搬し水田面より一丈四尺高めて今日の敷地が出来たのである。

斯くの如く石井氏は未だ何人も心付かぬうちに早くも工業招致に着目し既に二大會社を拉致したのである。

資料3 富士瓦斯紡績

當時自分は町長の職に在つたが、明治四十五年の七月の事である。富士瓦斯紡績株式會社が事業の大擴張を企て分工場敷地候補地を各地に亘つて物色中である聞き及んだので、早速町の有志と相談の上、同月十八日同社顧問日比平左衛門氏を品川御殿山の本邸に訪問し、是非川崎を以て分工場地に選定せられ

【図2】

さて、それでは『川崎誌考』を見ていきたいと思います [図2参照]。資料1の横浜精糖の部分を見ていきます。『明治三十八年に横濱の豪商増田増藏、阿部幸兵衛兩氏の計畫で、川崎と御幸村との入會地で六郷川の岸に沿ふた鐵道線路側に當る地點に、横濱製糖會社を設置さるゝ事となり、其處には自分の所有地が大部分あつた』とあり、ここでいう「自分」とは執筆者である山田蔵太郎氏ではなく、石井泰助氏のことです。横浜精糖の工場進出地の大部分が石井泰助氏の私有地であつたことから、同氏は買収交渉やその他いろいろな相談を受けたと書かれています。『日頃自分は何とかして繁華な川崎にして見度いといふ希望があつて、其れが絶えず念頭に浮んでゐた折柄であつたので、早速時價に相當せる坪壹圓の割で喜んで需めに應じ且小宮隆太郎、島田武助氏にも交渉を試みたと



【写真③】

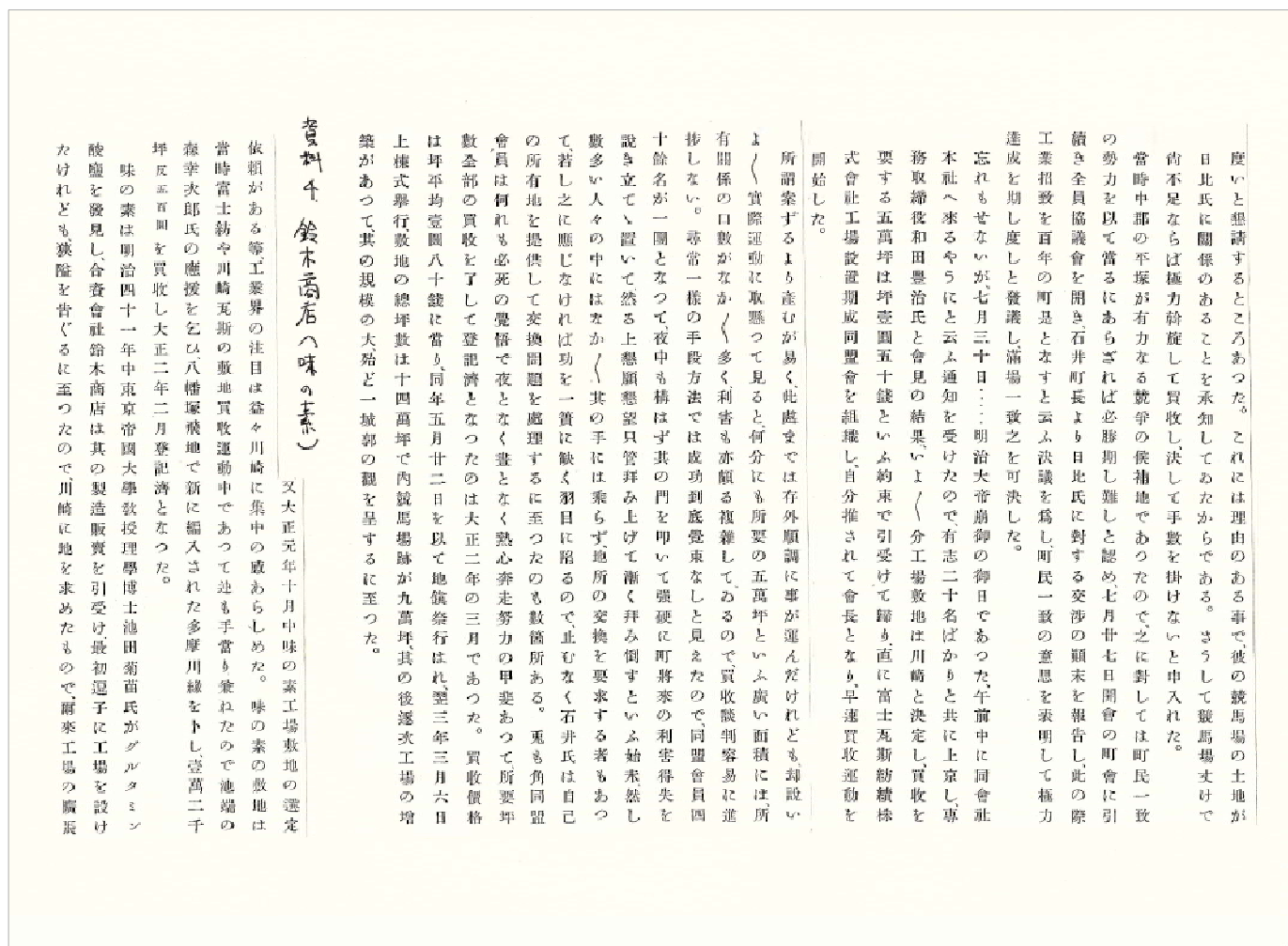
るところ兩氏も喜んで之に應ぜられたので、工場は程なく竣功して四十年の十二月開業となつた。』とあり、先ほどの高額納税者の1位・2位の小宮氏と島田氏の名が出てきます。高額納税者の1位から3位が買収交渉に応じたことで、工場用地が確保できたため、明治精糖が川崎に進出してきたということがこの本から分かります。

続いて、資料2に東京電気について書かれています。写真③は、昭和4(1929)年当時の東京電気(現・東芝)の工場風景です。資料2の冒頭に、『それから立川勇次郎氏が京濱電鐵社長であつた頃』とあります。大師電氣鐵道はすぐに京濱電氣鐵道と社名変更し、その当時の社長は、会社設立発起人である立川勇次郎氏が務めて

いました。続いて、『自分の所有地が一ヶ所にて一萬坪以上の者あり』と書いてあり、同氏はその頃に川崎に一万坪以上の土地を持っている者がいるという情報を得たことが分かります。

『将来川崎を工業地としたければ何卒利用の機会を得られたならば、最低値坪壹圓で御譲り致すに依つて、川崎の為に御配慮を被り度いと頼んで置いたことがある。其の話から二三年も過ぎた頃、其の時氏は東京電氣の重役であつたが、工學博士藤岡市助氏と共に其の地所を見せて呉れと云ふ申込があつた。』とあり、その後石井泰助氏が取った行動は次のとおりです。『自分の所有地の外更に一萬七千坪ばかりの買収方を委託されたので、これをも引受けて此の分は坪一圓三十錢錢で、自他總計三萬坪を取纏めて提供したのは三十九年の十二月であつた』自分の土地は最安値の坪一円で提供し、それ以外の土地は自分が所有者と買取交渉を行い、一円三十錢という坪値段を取り付け、3万坪の土地を取りまとめて東京電氣に提供したというわけです。これはすごいことです。

資料2の最後には山田蔵太郎氏の感想がこう書かれています。『斯くの如く石井氏は未だ何人も心付かぬうちに早くも工業招致に着目し、既に二大會社を拉致したのである』今の言葉でいえば、拉致というより誘致と言った方が良いかもしれません。山田蔵太郎氏は、石井泰助氏の見聞の明をたたえ、後の川崎発展の礎となる横浜精糖と東京電氣の誘致にあたっては、同氏の貢献が非常に大きかったと、ここで述べられているのではないかと思います。



【図3】

続いて、資料3[図2～図3]に富士瓦斯紡績について書かれています。同社工場は現在の川崎競馬場の場所にありました。工場建設前も元々競馬場だったので、その跡地が同社工場となり、そして現在は再び競馬場となっています。

『當時自分は町長の職に在つたが、明治四十五年の七月の事である。富士瓦斯紡績株式會社が事業の大擴張を企て、分工場の敷地立候補地を各地に亘つて物色中であると聞き及んだので、早速町の有志と相談の上同月一八日同社顧問日比平左衛門氏を品川御殿山の本邸に訪問し、是非川崎を以て分工場地ら選定せられ度いと懇請

するところあつた』当時、富士瓦斯紡績は、候補地として中郡の平塚と川崎で非常に迷っていました。これに対し、『之に對しては町民一致の勢力を以て當るにあらざれば必勝期し難し』とあり、皆で一丸とならなければ富士瓦斯紡績の誘致は成り立たないだろうということで、川崎町がとった行動は次のとおりです。『七月廿七日開會の町會に引續き全員協議會を開き、石井町長より日比氏に對する交渉の顛末を報告し、此の際工業招致を百年の町是となすと云ふ決議を為し、町民一致の意思を表明して極力達成を期し度しと發議し、満場一致之を可決した』これがよくいわれる「工場招致の町是」です。ただし、町議会の議事録に残っていないので、本当に町是があつたのかどうかは定かではなく、あくまでこの本に記されている限りではということになります。

『實際運動に取懸つて見ると、何分にも所要の五萬坪といふ』とあり、5万坪という広大な面積が必要ということで、所有者も多くて複雑に権利が絡み合っており、なかなか進まなかつたとあります。それでも最終的には、大正2 (1913)年3月になんとか全ての買収交渉を終え、登記済となつたということです。買収価格は、坪平均1円80銭で、5月22日には地鎮祭、翌年3月6日には上棟式が行われ、総坪数は14万坪になり、そのうち競馬場跡地が9万坪で、それ以外の5万坪を石井泰助氏がかき集め、富士瓦斯紡績に協力したということがここに記されています。

続いて、資料4[図3~4]には味の素のことが書かれています。元々味の素の工場は逗子にあつたのですが、手狭になり移転地を探していました。この味の素の工場招致にも石井泰助氏がかかわっているのです。ただ石井泰助氏だけであれもこれも同時にとはいかなかつたようで、味の素については池端の森幸次郎氏に取りまとめをお願いし、自らは後方支援に回つたということです。

機關設備の改善を試み、大正六年六月鈴木同族の出資に拘る株式會社鈴木商店創立され、該の合資會社の一部を之に合併し、大正九年に至つて移轉以來の擴張工事の完成を見るに至つた。

資料5 旭硝子

是より先き三菱家の重役青木菊雄氏から旭硝子株式會社の第二工場敷地に適當なる土地なきやとの黒回を受けただけでも川崎市内に船着き好い場所が無かつたので豫て自分が注目してゐた町田村菅澤から瀬田へ遷つた鶴見川沿岸の地を舉げて一應視察を求めたる所至極適當といふ事で大正四年七月廿七日附を以て買収方依頼狀を受けたので早速吉澤吉兵衛小野重行兩氏を始め同地の有志に相談に及ぶと、土地の繁榮上願ふてもなき幸ひなりとて夫々運動の結果意外に早く所要の地約拾萬坪の豫約買収が出来たのである。そこで同會社では工事設計書を神奈川縣廳へ提出し、河川法關係上の認可を出願した。然るに不幸にして認可とならなかつた爲に有志諸氏が折角二三月の日子を費した奔走の結果が全く徒勞に歸したのである。然し其の儘手を引いては他地方に占められる虞れがあつたので、淺野總一郎氏の經營に成る鶴見埋築會社の所有埋立地數萬坪を交渉に及んだ所幸ひにして採用され同年十月十五日工場建築と決定した。

資料6 川崎運河

之に夫いで京濱電鐵會社の運河開鑿事業である。同社線の八町駅停留場附近から瀬田の荒井瀬田海岸に至る千二百間の間に運河を開鑿し、其の左右兩岸を工場敷地とする計畫で、此の敷地買収は大正五年五月を以て開始された。

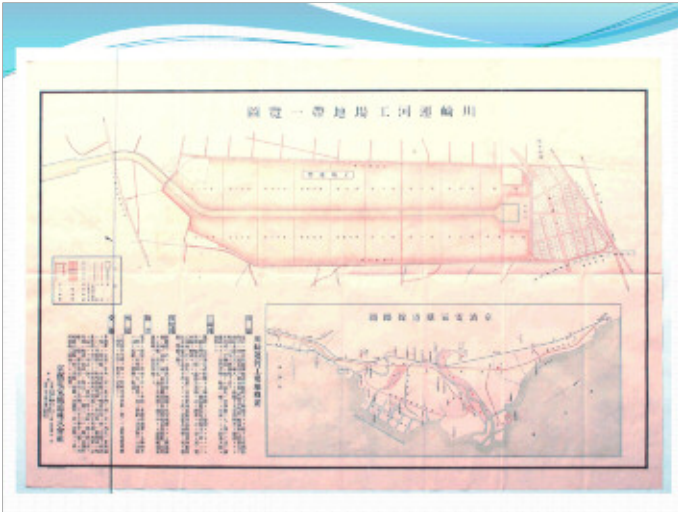
旭硝子會社工場敷地として目指した土地が認可とならず失敗に終つた時同地の有志から他日利用の機會の生じた場合は非考慮あり度旨頼まれてゐたのであるが多少方向は違ふけれども京濱電鐵會社に此の運河開鑿を建築し、勞々此等有志の希望に副ひ度き心算であつたと、幸ひ建築の容れられると共に土地買収方の委任をも受けたので運河開鑿同盟會を起し、關係町村から有志數名宛の参加を求め一致發力して買収に着手した。然るに何分にも所要の土地に關係あるもの田島町田川崎に亘つて約六百名といふので其れに一々當つて交渉を試ると所謂十人十色な注文や苦情が出て容易に進捗しない。最う厭き厭きして中止しやうかと思つた事が幾度あつたか知れない。然し到頭二ヶ年費して大正七年の五月漸く二十八萬有餘坪の買収を遂げたのである。斯様な困難と苦心のあつたに拘らず終に克く成功を遂げたのは各町村有志が偏に郷土の發展を思ふ一念から努力奮闘を續けられた結果で當時を顧ると感慨眞に無量ならざるを得ない。

資料176 山田蔵平著 川崎誌考 5より抜粋

〔図4〕

次に資料5[図4]の旭硝子については、鶴見川沿岸の地に同社工場を招致しようということで、川崎町とは離れていますが、石井泰助氏が買収交渉の責任者となっていました。しかし、河川法関係などの事情で認可が下りず、結局その場所に誘致できませんでした。最終的には、淺野總一郎氏が設立した鶴見埋築會社が所有する埋立地數萬坪に移転することになりました。これは石井泰助氏の誘致できなかった事例として取り上げられたりします。

最後に、資料6[図4]について紹介します。工場誘致ではないのですが、当時の京浜電気鉄道が川崎運河の開削事業を計画し、そのための用地買収を石井泰助氏が任されました。図5は、川崎運河工場地帯の当時の図面です。東



[図5]

東京湾から運河を引き、その両沿岸を工場地帯として提供するという計画でした。運河の近くに工場を立地すると、海運で輸送された資材・原料をすぐに工場へ搬入することができ、工場で製造した商品を船便により東京湾から各地へ出荷することができます。京浜電気鉄道と石井泰助氏は、工場を誘致しようと運河開削に尽力しました。現在は埋め立てられて残っていませんが、今の川崎区京町辺りになります。運河の対岸は鶴見区平安町で、ちょうど市境に川崎運河が開削されました。運河の「船溜まり」(船が停泊する所)といわれるプールのような場所が現在の京町小学校周辺です。なお、その先には八丁畷駅があります。

工場誘致を目的にこれだけの開発が進められたわけですが、残念ながら大正末から昭和初期にかけての経済不況の中で工場誘致が思うように進まず、多くは住宅地として分譲されてしまいました。

大正6(1916)年7月に京浜電気鉄道が運河開設の免許を取得し、翌年に28万坪に及ぶ土地の買収を成し遂げ、大正11(1922)年に川崎運河が竣工しました。こういう計画にも石井泰助氏がかかわっていたということを是非知っていただければと思います。

昨年に市民ミュージアムの事業として、当時の川崎運河をたどってみようということで歩いてみました。今でも運河跡地をなぞって歩くことが可能です。これも「かわさき産業ミュージアム」の素材の一つになるのではないかと思います。

③ 多摩川の改修

多摩川は、みなさんご存知のとおりの名うての「暴れ川」で、古くから洪水が絶えず、流域の村々に大きな被害を与えてきました。特に下流域での被害は大きく、慶長5(1600)年に徳川家康により六郷橋が架橋されましたが、洪水によって頻繁に流失し、貞享5(1688)年の大洪水で流失して以降は、明治に入るまで架橋されず渡し船による川越えが行われました。一方で、多摩川は母なる川とされ地域のかげがえのない水資源であり、かつて近隣の農業を支えた二ヶ領用水も多摩川の水を利用しています。このように多摩川は良い面・悪い面の両方を持ち合わせていました。

近代になっても、明治40(1907)年や明治43(1910)年に大洪水が起きています。その際は、川崎町から御幸村にかけて堤防が決壊し、水があふれ出てボートでの移動を余儀なくされたということです。この頃には既に横浜精糖や東京電気が進出しており、その辺りの状況についても山田蔵太郎氏が書いています。資料1[図2]の横浜精糖の後半に、『所が其の年の八月の大洪水で工場は濁水に浸されて大分難儀され、四十三年にも亦同様の不幸に遭遇するといふ結末で一時實業家方面では川崎は到底工場地にあらずと云ふ評判が立つたので、自分は内心慚からず心配したのである』とあります。「自分」とは石井泰助氏のことです。せつかく土地を安く提供して工場を誘致したわけですが、多摩川の決壊等の自然の脅威によって、川崎は土地は安い工場地には適さないという話が一時期実業家の間から出ていました。また、資料2[図2]の東京電気にも、『四十年と四十三年とに大洪水があつて、之が為に重役間に川崎放棄説が持上がると云ふ』とあります。これに対しては幸区の加瀬山の一部を削り取り、その土で盛り土して工場を招致したと書かれています。

工場を誘致するには、多摩川の洪水を何とかしなければならぬということで、石井泰助氏は多摩川の改修工事にもまい進します。改修工事については町だけでは解決できないので、再三に渡って県へ申請しますが、資金難で許可が下りなかったため、さらに国に負担を願い出るわけです。国の方も河川改修は必要だということで、全国の主

要河川の改修計画を立てますが、財源が足りず2期に分けて改修することになり、残念ながら多摩川は第1期河川に編入されず、早期実現の道が閉ざされてしまいました。

この結果を受け、これは何とかしなければならぬと地元の人たちが立ち上がり、多摩川改修工事の早期実現を求めて、大正3（1914）年に「アミガサ事件」が起きたのです。今年は、この事件からちょうど100年という節目の年にあたります。アミガサ事件は、御幸村・日吉村・住吉村などの村人が、多摩川が氾濫すると自分達の生活が成り立たなくなってしまうのに県も国も何もしてくれないと、江戸時代でいえば一揆に近い形で村民自ら県庁に大挙し押しかけ陳情行動で、このときに互いの目印となるよう全員がアミガサをかぶったため、こう呼ばれています。

事件後、村民だけに任せるのではなく、地元有力者が率先して改修問題にあたらなければならないと、地元有力者によって「多摩川改修治水同盟会」が結成されました。同会は、地元世論を喚起するとともに、地元議員への働きかけや、国庫補助の獲得など、多摩川改修工事に向けて精力的に活動しました。



〔写真⑭〕

写真⑭は、大正7（1918）年に撮影された多摩川治水同盟会員13人の写真です。前列の右から3番目が石井泰助氏です。その左隣が中原町の有力者の原文次郎氏、その左隣が当時の県会議員である池上幸操氏で、池上新田の池上家当主でした。後ろの人物は上平間の秋元喜四郎氏です。こうして多摩川周辺の有力者が一堂に集まって多摩川治水同盟会は結成され、その中心人物が、会長を務めた石井泰助氏だったのです。そして、会の活動が功を奏し、国庫補助が決定、下流域から工事が始まり、昭和9（1934）年3月に念願の改修工事が終了しました。それ以来、洪水がなくなったということです。以上のように、多摩川の改修工事にも石井

泰助氏の貢献があったというわけです。

さて、これまで石井泰助氏の話をしてきましたが、同氏は何を夢見てこれだけの仕事を成し遂げてきたのでしょうか。それは地域の発展を一心に願ってのことだったと思います。地域が発展するために何が必要か、それには人がたくさん集まらなければならない。そのためにより良い居住環境が必要だろうと上水道の敷設を行い、さらに発展するには地域経済を活性化する必要があるということで、地域の工業化を目指して工場招致を行った。大消費地の東京と貿易港の横浜に挟まれた川崎、その地の利をどう生かすか。そして水運・陸運の輸送面から川崎の有利性を見出し、工場招致を図ったといえるでしょう。一方で、当時の石井泰助氏にとっての地域とは川崎区周辺のこと、現在の川崎市の中原以北まではそんなに大きく意識していなかったと思います。そうした中で、石井泰助氏は、川崎市域だけでなく、横浜の鶴見も含めて臨海部を一带としてとらえて工場都市をつくろうと考えていたのではないかと思います。例えば旭硝子の誘致であったり、川崎運河の開削事業であったりと、これらにかかわっていたことを踏まえるとそう見て取れます。鶴見は横浜市ですが、貿易港の横浜というよりは、造成された埋立地に製造業を中心とした大規模工場が集積したという点からしても、川崎とよく似たような環境であることがお分かりいただけるかと思います。

このように石井泰助氏の夢は、地域一体の発展であったと思います。そのために、私財を投じて、土地の取りまとめであったり、各方面への調整であったりと力を尽くしたのだと思います。後の川崎市域形成の中で残念ながら鶴見は外れていくわけですが、臨海部を中心とした川崎の発展にあたり、大きな礎を築いたのは、間違いなく石井泰助氏、その人であったと思います。

【質疑応答】

Q:石井家の先祖は? 相当土地を持っているので良い家柄だったのでは?

A:

石井家の出自については全く分かっていません。ご子孫の方にお聞きしても分かりませんでした。石井家は当時の川崎町の大土地所有者であったわけですが、どの時点でそれだけの土地の集積を図ったのか、残念ながら石井家の史料が損失しているのではありません。唯一残っていたのが青梅の山林の絵図などで、こちらは現在市民ミュージアムへ寄贈いただいています。肝心の地元史料はほとんど残っておらず、あくまでも明治期の納税額や本日使用した史料の中からうかがい知るしかないのです。幸区や川崎区には石井さんという名字が結構いますので、元をたどれば一つにつながるかもしれませんが、家系図等が残っていない以上はやはり何も分かりません。

Q:川崎運河跡地を隔てて横浜市鶴見区と川崎区京町とのことですが、鶴見川を挟んで行政区画を分けることは当時考えられなかったのでしょうか?

A:

近代以降、さまざまな形で町村合併が行われました。臨海部でいえば、川崎では田島村が成立したり、鶴見ではいくつかの村が合併して町田村が誕生したり、あるいは、生麦と鶴見と寺尾が合併して生見尾村ができたりしました。元々の近隣村落が合併して新しい行政区画がつくられ、でき上がった行政区画に対しさらに他の村々が編入する、こうしたことを重ねて市境が生じていきます。川崎運河の場合は、たまたま運河を境にして元々異なる行政区画だったものですから、川崎側は川崎へ、反対側は鶴見へと合併し、今の市境となったわけです。市境の元々のラインをひも解いていくと、江戸時代の村落の一つの境界にもなっているということです。

以上